

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「道を歩く人がやってきた」⑧

徐々に暑さが増してきた7月12日(水)、わが輩は朝早く奈良天理市に出かけた。天理大学附属天理参考館「インドのヒンドゥー世界」展のオープニングに招待されていた。インド大使、総領事も臨席される。天理駅で総領事秘書と待ち合わせて、タクシーで参考館に向かうことになっていた。わが輩が早く着いた。天理といえば天理教。黒いハッピを着た若い男性がひとり空間に向かって、天理教の御教えを語り出した。

聞くとはなしに聞いていると、「この身体は神さまからの借りもの」と聞こえた。そのあとは定かでないが、「神さまから借りている身体を活かせるように、大事に使って、陽気ぐらしをしましょう」と聞いたような気がした。御教えでは身体は借りものだが、「心」(意思)は自分のもの、である。天理教では生まれ変わりを認めているので、その主体(魂)がなければならない。なんだかヒンドゥー教に似ている。

というわけではないが、9月4日までに参考館まで足を運んでいただきたい。今回、ギリ総領事はプリーのジャガンナート神、楽器ハーモニウムを寄贈した。

さて、「歩く人」について語ってきたが、「歩かない人」が十年ぶりにインドから帰ってきた。その人の名をソラミ女史としておこう。女史は46年前に初めてインドの土をふんだ。その後、南インドのアシュラム(宗教的共同体)に住んで23年になる。久しぶり、というわけではないが、茶話会を開くことにした。

その時の話をまとめてみた。(聞き違いがあればご免なさい)

26年前ソラミ女史にもグル(師)がいた。

「師よ、あなたが亡くなってしまったら、どうしたらいいのか」

と問うた。師は答えた。

「私のグルがいるのではないか、その方に仕えなさい」

と言われた。グルのグルだから、すでに現世にいない。身体を伴わないグルである。その助言によって、ソラミ女史は北インドから南インドに移ってきた。

さて、ソラミ女史は23年間も何をしていたのか。

何ごともしていなかった。

「何もしない・・・？」

現世に生きている限り、何かをしないと生きていけない。インドのことだから、困った事だらけである。ソラミ女史は困ったことがあるとどうするか。

「グルに祈ると、不思議と消える」

そんな不思議に出会って23年間、だと言った。また、次のようにも言った。「おろかさが身に染みて分かった。今もまだおろか。それに気づくと“清らか”になる」と。

ソラミ女史がいる聖地、空間は至高のパワーが充満している。瞑想しようがしまいが、すでに「それ」なのだ。それとは、絶対的存在のことである。私たちの実在そのものが「真我」である。それは悟ったもので、すでに悟っている。

本当の自己・真我を実現しようとするのはミステーク。まだ実現していないというのは先入観・誤認にすぎない。

そのミステークに気づくことがリアライズ（悟り）である。

「気づいて、あるがままに生きる」

気づかないで、あるがままに生きることもできるが、それは外形の問題である。

瞑想、祈りや儀礼は「心」のため、心を静めるために役立つ手段だが、リアライズ（悟り）ではない。つづけて、ソラミ女史は言う。「私とは何か」を探究しなさい。

これは答えを求めているのではない。源泉にふれる。これで十分。答えはない。

道（努力や業）を求める必要はない。そもそも、道はない。ないので歩く必要はない。

ソラミ女史が言いたいのは、変化しない“不滅の魂”だけがあって、われわれのしているものはすべて幻、変化するものにすぎない、ということである。だから老いゆく肉体に固執してはいけない。

それを聞いたM先生が「わたしは肉体も大事だと思う」と意見を述べた。M先生は身体に関わる仕事をしている。たとえば、酷い腰痛になれば、心が乱れ、苦しみに悩まされる。健康あつての人生ではないか、というのがM先生の考えである。天理教の御教え「借りものである身体に備えてもらった可能性を活かし、使ってー」という考えに近い。

突然の異論に、われらの秒針が止まり、沈黙がおりてきた。無言と沈黙は異なる。沈黙に答はない。インド語でマウナ（Mauna、Silence）と呼ばれる「沈黙」こそ、深い哲学だからである。

このエッセイを電車内で書いているとき気づいた。だれもが無言の会話に勤しんでいる。みなさんスマホを熱心にいじって、膨大な量の画面と情報を眺めている。

「そんなに沢山の夢や幻を見て、何をしたいの？」

ソラミ女史なら、インドの霊山から、きっとそう言うだろう。